

金賞

「ちいばあちゃん」

横須賀市立衣笠中学校三年

野中美沙

私には幼い頃から一緒に暮らしてきた、曾祖母がいます。背が小さかったので、昔から「ちいばあちゃん」と呼ばれています。ちいばあちゃんは、私が幼稚園生だった頃、元気で明るくよく笑っている人で、いつも私にご飯をつくってくれたり、遊んでくれたり、おむかえに来てくれたりもしました。小学生になると、よく怒られることもありました。でもいつも私のことを暖かく見守ってくれる優しさのあふれる自慢のおばあちゃんです。

ある日、ちいばあちゃんが玄関で転んで、足が動かしにくくなっ
てしまい、私は祖父母がちいばあちゃんの介護をするのを毎日手伝
いました。祖父母はまだ、仕事をしているので帰ってくるのが遅く、
私はよくちいばあちゃんと二人でいることが多くありました。昔ち
いばあちゃんが私にしてくれたことに恩返しをしたくて、ご飯づく
りや、掃除をするようになりました。

今までは、自分でトイレに行くことくらいならできたのですが、

日に日にトイレに行くことが困難になり、祖父母は「オムツを履けば、トイレに行かなくても良いのに。」と言っていました。しかし、ちいばあちゃんは、オムツを履くのは嫌だと言って、毎回トイレに自分で行っては倒れて、私たちが毎回起こして、ベッドまで運ぶ日々が続きました。私は心配だったのでよく泊まるようになり、夜中に「ガタンッ」という音が何回も響きわたり、祖父母は寝ていて気付かないので、私は眠ることが出来ませんでした。私は「なんでオムツ履いてくれないの？」とよく強い口調で言っていました。そのときの私は、人の気持ちを思いやることを忘れていたのです。

ちいばあちゃんは、友達とよく電話していました。私が学校から帰ってくると、その友達と話していて、そっと話を聞いていると、「私は、みんなのじゃまだから、さっさと逝ってしまいたい。負担になりたくない。早く楽になりたい。」と泣きながら言っているのです。私はそれを聞いて、ちいばあちゃんをおいつめていたことに気付きました。今まで単純に役に立ちたいって思ってたのですが、「なんで言うことを聞いてくれないのだろう。」や、「なんで、みんなの迷惑になることをするのだろう。」などと思っていたことにその時、気付いたのです。

その日から私は、考えかたをかえました。ちいばあちゃんの話を知り、一緒にできる遊びを考えたりして毎日を過ごしました。そうすると、今までに聞けなかった言葉がちいばあちゃんの口から、出て来たのです。

「今まで出来た事が、だんだんと出来なくなっていくのが怖い。だから自分に、まだ出来ると言い聞かせて、身近に出来る事からやっつけていきたいの。」私はその言葉を聞いて、改めてもっと役に立ちたいと思いました。

この事から、今回の人権を考えるに当たって私が思ったことは、人にはそれぞれの意思があり、それを実行する自由があり、また人が人として平等に生きられる権利を持っているということです。ちいばあちゃんが自分でしたいと思っていることを、周りがとやかくいってその意思をむりやり曲げてしまえばそれはもう、りっぱな人権侵害なのだと思います。

私はもう、ちいばあちゃんに辛い思いを一人ですてほしくないのだから、人の気持ちを思いやることを二度と忘れません。

そして今は、歩くことも食することもできなくなってしまったので、ちいばあちゃんは医療型長期入院施設に入院しています。私の

ちいばあちゃんは、今年で九十歳を迎えます。でも、認知症にはな
っておらず、むしろ凄くさえていて、「何月何日に来て以来〇〇さん
来てくれないのよ。」などと、よくチェックしています。私は、時間
があればいつもちいばあちゃんのところへ行き、他愛のない話、で
も二人にとっては心暖まる話をしながら、流れていく時を過ごして
います。ちいばあちゃんは、いつも帰りぎわに「みーちゃん、来て
くれてありがとね。」と言ってくれます。私ははじめ、泣きそうでし
た。そして、病室を出るときに、私たちが見えなくなるまで、ずつ
と手をふっています。私は、ちいばあちゃんのことを大好きです。
これからも、ずっとずっと元気で長生きをしてくれることを願って
います。